

No. 59

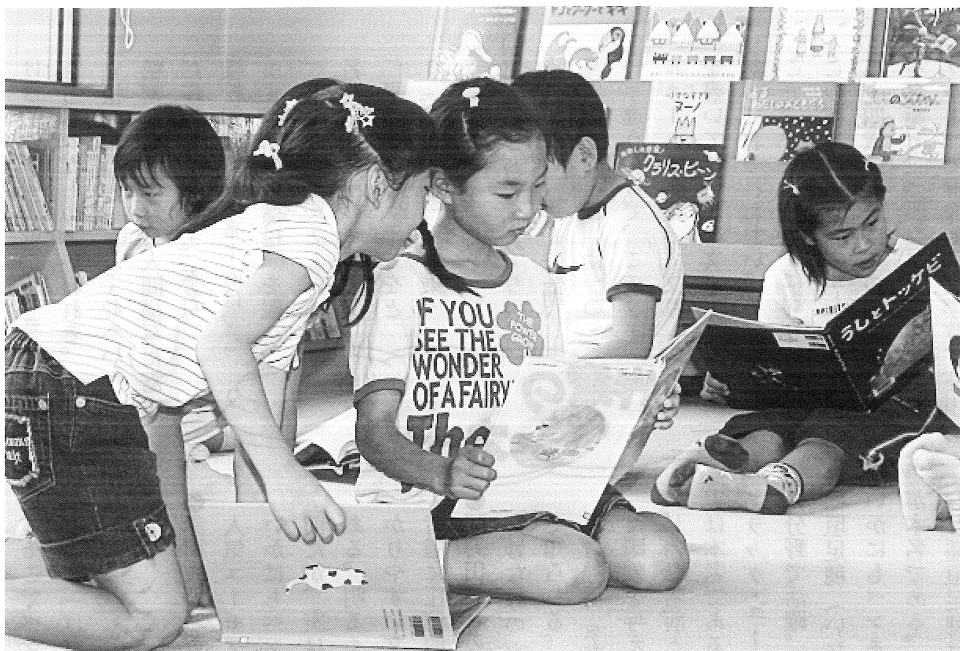
2007年9月1日発行

宇治市中央図書館  
〒611-0023 宇治市折居台1-1  
0774 (39) 9256

宇治市東宇治図書館  
〒611-0011 宇治市五ヶ庄三番割36-5  
0774 (39) 9182

宇治市西宇治図書館  
〒611-0042 宇治市小倉町山際63-1  
西小倉地域福祉センター3階  
0774 (39) 9226

# と し ゃ か ん 宇 治



「小学校図書館見学会より」

## 夢の実現に向けて

宇治市中央図書館長 伊藤 勉

宇治市では、本年三月に「宇治市子どもの読書活動推進計画」を策定しました。この計画は、子どもの自主的な読書活動を推進するために、次の三つの基本的方針を明記しています。

①乳幼児期から読書を親しむことができるような環境づくりが必要です。子どもが読書に親しむ機会の提供と、施設・設備その他の諸条件の整備・充実に努めます。

②家庭・地域・学校が連携し、社会全体で子どもの読書活動を推進する取組が必要です。それぞれが担うべき役割を明らかにした上で、相互に連携・協力を図り、様々な取組の推進に努めます。

③子どもを取り巻くすべての人々が、子どもの読書活動の意義と重要性に理解・関心を持つことが必要です。子どもの読書活動への理解と協力を広く求めるため、その啓発と広報に努めます。

また、この計画に合わせて、「学校図書館と市立図書館の連携についての指針」を策定するにあたり、初めて各関係者が集い協議を重ねる場をもちました。その中で、ともすれば学校図書館と市立図書館双方が十分な連携をせずに独自の活動を展開してきたきらいがあったことを反省し、各々の実態を踏まえた情報交換ができたことは、大変有意義だったと言えます。

策定しました指針をもとに、従来より学校現場から要望されていた団体貸出制度を発足させ実施しました。これは、一人十冊を限度に三週間を期限としています。個人貸出とは別に、一校五十冊を限度に一月間を期限とするものです。これによって、学校での調べ学習等に少しでも役立てればと考えています。

この他にも、「学校図書館と市立図書館連絡会」を発足させ、指針策定後の関係者の情報交換の場とするともに、学校図書館のデータベース化に向けた方針づくりを協議し、その実現を目指していくことにしております。

まだ、いくつかの取組を始めたばかりですが、これらの地道な取組が一つの力となって、一人でも多くの子どもたちに本を読む楽しさや喜びを知ってもらい、「本が大好き」と言ってもらえるようになればと考えています。

そのことが、本を読みたくとも、なかなか読める条件や環境になかった団塊の世代の一人である私の夢の実現になることを願って……。

## 知っていますか、その由来

古今東西の作家のペンネーム。いかにも意味がありそうで、つい「その由来は？」と尋ねたくなります。

そこで今回は、日本の作家のごく一部ではありますが、ペンネームにまつわるエピソードとか、ペンネームと思い込んでいた作家が、まぎれもない本名だったとかを知ること、より身近に作家を感じていただければと思います。

○小松左京（こまつ・さきょう）：戦後の日本SF界をリードした存在。『日本沈没』が一大ベストセラーとなる。本名、小松実。ペンネームは、学生時代（三高、京大）京都・左京に住んでいたことによる。

○笹沢左保（ささざわ・さほ）：時代小説のヒーロー「木枯し紋次郎」の生みの親。本名、笹沢勝。ペンネームの「左保」は、夫人の名前「佐保子」を借りてネーミングしたもの。はじめはこの「佐保」を名乗るが、後に現在の「左保」に改めた。

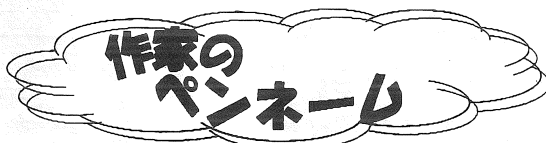
○佐野洋（さの・よう）：推理小説界を舞台に活躍。本名、丸山一郎。ペンネームは、デビュー当時「読売新聞」の記者であったため、匿

名で書く必要があり、ふざけておけさ節の間の手の「サノヨイヨイ」をもじったものといわれる。

○立松和平（たてまつ・わへい）：精密な構成と深い人間描写に富んだ作品を多く書く。本名、横松和夫。ペンネームは、まず本名の「横松」を縦にして「立松」とし、本名から「和」の一字と父仁平の名から「平」をとって「立松和平」と名乗ったものである。

○村上龍（むらかみ・りゅう）：本名、村上龍之助。芥川龍之介とは「助」の一字違うだけで、このフルネームを名乗って文章を書いては、かの文豪に對しておそれおおい。そこで、「龍」の一字に切り詰めてこのペンネームが誕生したという。二十四歳のときにこのペンネームを名乗り、『限りなく透明に近いブルー』で群像新人文学賞、芥川賞をダブル受賞した。

○よしもとばな（よしもと・ばな）：デビュー当時の筆名は、吉



本ばな。本名、吉本真秀子。彼女は、あるとき、バナナの巨大な花に出会い、バナナに恋してしまい、そこでペンネームを迷わずシンプルに「ばな」と名付けたと

## ペンネームと思いきや、実は本名

●赤川次郎（あかがわ・じろう）：人気ユーモア・ミステリー作家。いかにもペンネームと思える名前だが、実は真正銘の本名である。明るく健康的な作風とわかりやすい文体により、若い読者層に圧倒的な支持を受ける。

●阿刀田高（あとうだ・たかし）：奇妙な味のショート・ショートで知られる。ペンネーム「阿刀田高」は、字面も読み方も変わった印象を与えるため、何かをもじった名前と思われるのだが、実は本名である。人気作家としてブラック・ユーモアやミステリーの分野で活躍。

●稲垣足穂（いながき・たるほ）：いかにもペンネームらしい名前だが本名である。反骨と奇行で鳴らした稲垣足穂は、大正・昭和期を「タルホ大慧屋」のごとく駆け抜けた作家である。

●俵万智（たわら・まち）：歌人。

いう。また「二〇〇三年に子をもうけるが、その子の名前を姓名判断で考えていたら、自分の名前こそ良くない事がわかり、今のペンネームに改名した」という。

いかにも歌人の号にふさわしい印象を与えるペンネームだが本名である。ちなみに本名の「万智」は姓名判断にこっていた祖母が名付けたもの。母「智子」の一字をとり、「画数も申し分ないし、とにかくいい名前」ということで「万智」に決まったという。

●村上春樹（むらかみ・はるき）：本名はペンネームに同じである。村上春樹が発表する小説・エッセイは若者の間に圧倒的な人気を呼び、それをマスコミは、「村上現象」と呼んだ。

以上、ほんの一部ですが興味はつきません。これを機会に、気に入った作家、関心のある作家のペンネームの由来、探してみませんか。

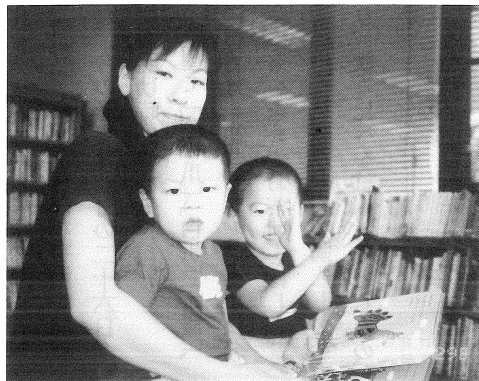
引用・出典：『作家のペンネーム辞典』佐川章著（創拓社刊）、フリー百科事典『ウィキペディア』

図書館へようこそ

利用者インタビュー

第45回

岩崎保子さん



今回は東宇治図書館を、よく利用して下さっている岩崎保子さんに、図書館のこと、本のこと、いろいろお話をうかがいました。

こんにちは。今日は子どもさんたちと一緒にいますね。

保育所に行っています。

お仕事も始められたとうかがいましたが、大忙しですね。

そうですね。以前のように、図書館に子どもを連れて来ることが難しくなりました。大急ぎで保育所に迎えに行ったあとで連れて来られないこともないのですが、迎えに行くと、子どもがなかなか帰ろうとしないんですよ。保育所で遊んでいるところを、私に見てほしいらしくて……。

ああ、わかる気がします。それに保育所に楽しく通ってられるのも伝わってきます。

連れて来たいのですけどね。子どもが生まれたときから、図書館に行くことというか、本を読むこと、映画館に行くことが、自然に日常生活にあるような大人になってほしいと、ずっと思っています。

すてきなことだと思います。なんとなく今、岩崎さんという方を知った気がします。岩崎さん自身、子どもの頃から、本に親しんでこられたんですね。

そうですね。子どもの頃から両親に図書館に連れて行ってもらってました。それに祖父母も居る家でしたので、よく本を読んでもらった記憶があります。

本に親しめる環境で大きくなられたんですね。

今にして思えばそうですね。岩崎さんも子どもさんに、よみかかせをされているのですか？児童書もたくさん読んでられますよね。

よみかかせ、しています。おすすりリストから本を選ぶと、いつもは読まないような本にも出合えて面白いのです。

そうですね。自分の読書の幅も広がりますよね。インターネット予約もご利用ですが、便利ですか？

すっごく便利です(笑)家で手の空いた時間にできるので、「えほんのおすすりリスト」から、検索、即予約申し込み、という手軽さがいいです。以前は手書きした申込書をカウンターに出していましたが、今ではほとんどネット予約です。本当に便利で助かってます。

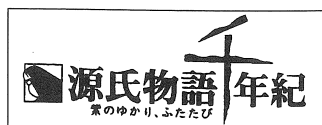
ありがとうございます。

ありがとうございます。そんなに活用していただいて、よろこんでいただいて、こちらもうれしいです。ところで、インターネットも含めて、図書館になにかご要望はありませんか？

そうですね、ネット上で予約の順番を確認したり、過去の読書の履歴が見られたらいいなって、思っています。

貸出記録は個人情報を守るという点から、難しいと思います。そのご要望は多いのですが、予約の順位を確認したり、というのは、現在のシステムではできませんが、次のシステムの入替の時には、そういう便利な機能を盛りこんでいければいいかと考えています。

今日はお時間を作っていたいただいてありがとうございます。これからもどうぞご利用ください。はい。これからもよろしくお願ひします。



本棚の中の宇治

金森敦子

『きよのさん』と歩く江戸六百里』

今からちょうど一九〇年前の文化十四年(二八一七)六月十三日、「清野」という女性が宇治を訪れた。今の暦では七月の二十六日、梅雨明け時分である。

亀屋で「鷹の爪」「白折」「折鷹」、柳屋では「初昔」など、まずは名産の茶を求めてお茶屋をはしご。「喜撰」は両方の店で購入しており、飲み比べを試みようとしたのか。

この日の宿は旅籠「かぎや」。もはや盛りの季節を過ぎたのはわかっているものの、せっかく宇治を訪れたのだから名高い蛸を一目見たいと念じていると、思いが通じたのかたった一匹だが蛸が舞い込んできた。みずから「不思議の事也」と記すが、この件と違い、当地に着くなりお茶屋に飛び込むなど、彼女の行動力と意志は並大抵ではない。

翌十四日は平等院、恵心院、興聖寺を見物した後、喜撰山を越えて一路石山寺へ。

今回紹介するのは、江戸時代の旅に関する著書を多数あらわしておられる金森敦子氏の最新作。出羽国の城下町鶴岡(現在の山形県鶴岡市)の豪商の内儀「きよのさん」の旅。距離にして二三四〇キロ、一〇八日を要した「ゴージャスでスリリング」な「大観光グルメ旅行」の二部である(同書カバーの宣伝文より)。大部分が平仮名で、現代人には読みにくい古文書を漢字仮名交じり文に置きかえたうえ、詳細な解説を付す。

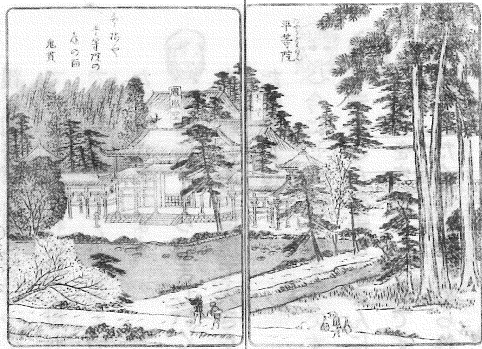
ただ、宇治での二日目の記事のうち次の部分は意味不明のためか、さらりと流す。

十四日よりまさのあふぎのしは、くちやくとふニ参り、それより恵心院・・・

「清野」が記したこの文章を金森氏は「頼政の扇の芝、孔雀塔に参り」とするが、解説では孔雀塔には触れずに平等院の境内案内に終始している。

さて、謎の孔雀塔である。筆者はこれを鳳凰堂と見る。孔雀が実在するのに対し、鳳凰は想像上の生き物というのは現代人の感覚だ。孔雀を見る機会がなかった江戸時代の人びとにとってはどちらも同じ事。おそらく清野は「鳳凰堂」と聞いたのだが、宿屋に落ち着いて道中日記を書く段になって混乱し「くちやくとふ(孔雀堂)」と記してしまふ。それを金森氏はまさか「鳳凰堂」とは思わないから「孔雀塔」と漢字を当ててしまった、と想像するのだが、いかが。

『宇治川兩岸一覽』より平等院



利用案内

- ・市内に在住、または市内に通勤・通学されている方なら、貸出券を作ること一人十冊三週間、本が借りられます。貸出券は全館共通です。図書館で借りた本は市内のどこの図書館へも返却することができます。
- ・図書館は九時から十七時まで開館しています。休館日は毎週月曜日、第四木曜日(いずれも祝日の場合は翌日)、祝日の翌日(土・日曜日の場合は平日に振替)、年末年始です。
- ・予約された本を市内四カ所の公共施設(木幡公民館、横島コミュニティセンター、南宇治コミュニティセンター、開地域福祉センター)で受け取ることができます。毎週一回、木曜日の午後に搬送します。
- ・図書館で借りた本は公共施設へ返却することはできません。

あ と が き

もうすぐ、待ち遠しかった秋になります。ずむしやコオロギの虫の声を聞きながら読書するのも、オツなものと思われませんか。そういう場所を探し歩くのも、チョットした運動にもなりますよ。図書館では、皆様のご来館をお待ちしています。どうぞ、お気軽にお越しください。